

中国語を母語とする学習者の日本語作文に見られる誤用

～母語音韻の干渉と思われるもの～

太田 栄次

Error that occur in Japanese composition written by Chinese mother tongue speakers

～associated with the phonological system of the mother tongue～

Eiji OHTA

Abstract

Phonological error is one of the problems in learning a foreign language. This is largely due to interferences from the mother tongue. In this study we analyzed Japanese composition written by Chinese mother tongue speakers, with particular emphasis on those errors associated with the phonological system of the mother tongue. We then attempted to establish clear characteristics of these errors.

Key words : Chinese mother tongue speakers、Japanese learner、composition、interferences from the phonological system of the mother tongue

キーワード：中国語母語話者、日本語学習者、作文、母語音韻による干渉

はじめに

中国語母語話者が日本語を外国語として学習する際、往々にしてその習得しようとする日本語の音声は、中国語の音韻体系によって影響を受けることがある。例えば、日本語の/ba/と/pa/では有声と無声の違いが対立しているが、中国語の/pa/と/p'a/はどちらもとも無声であり、無気と有気の違いがそれらの区別に役立っている。つまり、そのため中国語母語話者にとって/ba/と/pa/の区別を習得することが困難であり、聞き分け、発音ともに難しい。このような中国語母語話者にとって区別、習得が困難である日本語音は主なものに以下のものがある。

- ① 有声子音と無声子音の区別
- ② 促音「っ」
- ③ 長母音
- ④ 撥音「ん」

これらの中国語母語話者にとって習得困難である日本

語音については、中国語母語話者と日本語母語話者の発話による音響的特徴に関する研究がなされており（杉藤（1996）西端（1993）ほか）、その実態も明らかにされつつある。しかしながら、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能の一つである「書く」際にみられる誤用にどのような特徴がみられるのかについては明らかではない。

今回は中国語母語話者の日本語作文に見られる誤用の中で、特に母語音韻の干渉が原因だと思われるものに焦点を当て、そのような誤用がどのような環境で起こっているか、その傾向を分析することを目的とする。また、ある誤用の特徴があらわれる理由の説明を、中国語音韻体系からの干渉という視点から、可能な限りおこなう。

分析対象

筆者は2004年9月から2005年6月にかけて、台湾の銘伝大学応用日本語科において日本語教師として勤務した。この間、日本語作文を担当する機会を得た。分析対象とした作文は、このクラスの台湾人学習者37名が書

いた作文である。このクラスの学生は3年次であり、個人差はあるもののほぼ中級程度の日本語能力を有していた。なお、台湾では「国語」と呼ばれる中国語が広く通用している。この「国語」は、現在中国大陸においてテレビ・ラジオ・新聞などを通じて広く使用されている「普通話」と呼ばれる中国語とほぼ同質のものであり、その意味で、学生全員を中国語母語話者と見なすことができる。作文データの文の総数は合計1796個であり、1人当たりの文の数は48.54個であった。

概要

対象とする作文データから母語音韻の干渉によると思われる誤用例を抽出した。中国語母語話者の誤用の概要は以下の通りである(表1)。学習者の実に78.3%に誤用がみられた。個々でみると、誤用のみられなかった学生から、1人で最多12個の誤用がみられた学生まで幅広く分布しており、誤用の有無にはかなりの個人差がある。

(表1) 中国語を母語とする学習者の日本語作文に見られる誤用の概要

学習者	誤用あり	29名	学習者全体の78.3%
	誤用なし	8名	学習者全体の21.6%
誤用件数(合計)		97個	文1851個につき、1つの誤用
1人あたりの誤用件数(平均)		2.62個	1人の誤用件数 最小0個~最多12個

関(2000)における韓国語母語話者の日本語作文の分析を参考にして、学習者が誤りやすいと思われる音声項目を設定し、誤用例をそれぞれの誤用の項目ごとに分類した。(表2)

(表2) 中国語を母語とする学習者の日本語作文に見られる誤用の傾向

音声項目		頻度	割合(%)
清音と濁音	清音の濁音化	24	24.74
	濁音の清音化	17	17.52
促音	添加	12	12.37
	脱落	12	12.37
長母音	添加	4	4.12
	脱落	6	6.18
撥音	添加	2	2.12
	脱落	0	0
音韻の交替	特殊拍の混同	5	5.15
	母音の交替	9	9.27
	子音の交替	1	1.03
その他		5	5.15
合計		97	100

考察

1. 清音と濁音

1) 清音の濁音化

- ① 頻度 24.74% 24個
- ② 語頭 /t/→/d/ (5個)
- ③ 語中 /t/→/d/ (17個)、/k/→/g/ (2個)

清音の濁音化は語頭(5個)よりも語中の(17個)において、その頻度が高くなっている。その原因として、蔡(1983)で指摘された日本人の無意識の発音の傾向の影響が考えられる。蔡(1983)では「日本語には音声学的に有気無気の対立はなく、有声無声の対立があるのみである。但し著者の観察によれば有気無気の対立がみられる。」として、とくに「p/t/kの発音」として次のような解説を加えている。

「p/t/k/各行の音が、

- i) 語頭にある時は有気音、促音や撥音に続く時は無気音
- ii) /チ/、/ツ/を除く夕行の各音が第2音節以下に来る時は無気音になることが多いが、発生時の語気によって即ち、強める言い方とか穏やかな話し方といった発話時の情緒によって変わるので、一定した現象はない。」

中国語では、破裂音、破擦音はどの場合も無声子音であり、有声子音はなく、無声子音の中では有気音と無気音とが対立している。一方で日本語では有声子音と無声子音とが対立している。したがって、前述した「p/t/kの発音」の傾向は中国人母語話者を混乱させることとなる。清音の濁音化の誤用には、このような母語音韻の干渉が原因とみられる例が多く見受けられ、上記のi) ii)で指摘された音環境での誤用は清音の濁音化の誤用全体の3分の2を占める。

- i) 促音や撥音に続く無声音が有声音で表記されたもの

- ・花ちゃんはちよつともだないと思って、
(←もったいない)
- ・ほんどに不孝なこどもでしたね。(←ほんとうに)
- ・親子はほんどに困りました。(←ほんとうに)
- ・子供に歩かせて親がロバに跨るなんで (←なんて)
- ・なんで親不孝な子供だ。(←なんて)

- ・ロバがいるのに、乗らないなんて、 (←なんて)
- ・私は今たった十円しかありません。 (←たった)
- ・親子はその話を聞いてそうだった。 (←だった)

ii) 第2音節以下に来る/チ/、/ツ/を除くタ行の各音が有声音で表記されたもの

- ・「それもそうだ。ロバはつかれただろう。」 (←つかれただろう)
- ・「ちょっと子供を座らせてみだい」と言った。 (←みだい)
- ・タクシーを呼びたいんでしたが、 (←でしたが)
- ・それでも、 (←それとも)
- ・それにしても誰も助けに来てくれなかった。 (←それにしても)
- ・歩いている人、 (←歩いている)
- ・とてもいい天気でした、 (←でした)
- ・そして、関係ない人も戦いに巻き込んでしまった。 (←そして)

語中と比べて語頭ではその誤用の数は少なかったが、そのすべてが/t/→/d/とした誤用であった。このように誤りが偏った要因については今後さらに詳しく分析する必要がある。

2) 濁音の清音化

- ① 頻度 17.52% (17個)
- ② 語頭 2個 /b/→/p/ (2個)
- ③ 語中 15個 /d/→/t/ (12個)、/g/→/k/ (3個)

濁音の清音化は語頭(1個)よりも語中(14個)において発生頻度が高かった。その原因の1つとして、連濁に関係する誤用が多く見受けられたことが挙げられる。連濁とは語と語が接続するとき、後の語の最初の音が清音から濁音に変わることをいい、後部要素の初頭子音が/k/、/s/、/t/、/h/のどれかである場合、それぞれ/k/→/g/、/s/→/z/、/t/→/d/、/h/→/b/のように変化するものである。また、洪水(「こう」+「すい」→「こうずい」、香水(「こう」+「すい」→「こうすい」)のように、規則として捉えにくい面もあるため、日本語学習者にとって習得が困難である。以下が連濁に関係する誤用の例であるが、これらの誤用はすべて/d/→/t/であった。

- ・コローさんは自分の子どもたちを保護するため、 (←子ども)
- ・去年、子どもから大人まで世代を超えた幅広い層に支持された日本の映画 (←子ども)
- ・このとき、迎えて来たのは親の友たちだった。 (←友だち)
- ・私はときとき小説を読みます。 (←ときどき)

その他の誤用として次のようなものがあるが、/d/→/t/の誤用が最も多い。

- ・親不孝だな。なんて親に歩かせる (←なんて)
- ・「なんて、あの子はまだ元気で、お父さんを歩かせて」 (←なんて)
- ・ロバがいるのに、乗らないて肩に担ぎました。 (←乗らないで)
- ・クイールのおかげで (←おかげで)
- ・何をしても人に批判されそうた。 (←そうだ)
- ・ロバがまた小さいのに、 (←まだ)
- ・町までまたまた遠いなあ (←まだまだ)
- ・何もなくてぼーとしました。 (←ぼーっと)
- ・親子たちはただぼーと川をみつめていた。 (←ぼーと/ぼーっと)

2. 促音

中国語を母語とする日本語学習者にとって、日本語の促音の発音は困難だといわれている(西端(1993))。中国語母語話者の促音の聴き取り及び発音の問題について、これまで、促音が「1拍」であることが捉えられず、促音があるのに無いと聴き取ること(内田(1991)、西端(1993))、促音がないのに促音があるように(「1拍」分余分に)捉えること(皆川(1996) 西端(1995))が報告されているが、作文の誤用においても、促音の添加と脱落が同程度の頻度で起こっている。

1) 促音の添加

- ① 頻度 12.37% 12個
- ② 先行子音 /s/ (3個)、/g/ (2個)、/k/ (2個)、/m/ (1個)、/n/ (1個)
- ③ 先行母音 /i/ (4個)、/a/ (3個)、/e/ (4個)、/o/ (1個)
- ④ 後続子音 /t/ (11個)、/k/ (1個)
- ⑤ 後続母音 /e/ (5個)、/a/ (6個)、/o/ (1個)

先行する音をみても、無声摩擦音、有声摩擦音、鼻音、母音などさまざまな音環境の後に促音が添加されている。先行母音別では、/i/、/e/、/a/の前舌、中舌母音で促音が添加されたものが比較的多かった、後舌母音である/o/では1個、/u/の後に促音が添加されたものはなかった。また、促音が添加された誤用の中で、先行する音節がCVではなく、Vであったものは3個あったが、その3個とも先行する母音は/i/であった。このような母音の環境が促音の添加と関わりがあるか、関わりがあるのならどのような関わりがあるのかを明らかにすることは今後の課題である。なお、促音の添加は後続子音が/t/の場合に集中しているが、それは動詞のテ形とタ形が多く現われたためである。以下が誤用の例である。

- ・昔、変な父親と子供がいった。(←いた)
- ・この三人が「どうしようかな」と困っていった。(←いた)
- ・強い自己意識を持っていて。(←いて)
- ・体つきのよいロバにもっと重い物を背負わせてみるべきじゃないか。(←背負わせて)
- ・兄弟はやがて会うことができるのに。(←やがて)
- ・隣の男の人のきている服 (←着て)
- ・西部広志はもっとは悪名が高いですが。(←元は)
- ・彼は彼女達に一人とも結婚する気がなかった。(←なかった)
- ・荷物をのせたら子供をのせたほうがいいでしょう？(←のせたら)
- ・近くのある店で傘を見つけた。(←見つけた)
- ・ポスターを持ち逃げてしまいました。(←逃げて)

2) 促音の脱落

- ① 頻度 12.37% 12個
- ② 先行子音 /s/ (1個)、/ch/ (2個)、/m/ (4個)、/n/ (1個)、/r/ (1個)、/k/ (1個)
- ③ 先行母音 /i/ (3個)、/a/ (8個)、/e/ (1個)
- ④ 後続子音 /t/ (12個)
- ⑤ 後続母音 /e/ (5個)、/a/ (7個)

先行する子音に関しては、促音の脱落も促音の添加の場合と同様、さまざまな音環境の後で促音が脱落していることがわかるが、先行する母音に注目してみると、先行母音が/a/の場合、比較的促音が脱落しやすい傾向があり(8個)、誤用全体(12個)の中の3分の2を占めている。促音の添加場合と同様に、この誤用の傾向が中国語母語話

者における日本語の発音を反映しているのかどうかについては、さらに詳しい音響学的調査を必要がある。

- ・親子はヘトヘト疲れてしまて。(←しまつて)
- ・笑ってしまた。(←しまつた)
- ・関係ない人も戦いに巻き込んでしまた。(←しまつた)
- ・博士に助けてもらて。(←もらつて)
- ・最初はまたく息の合わない一人と一匹だったが。(←またたく)
- ・ロバは自分が売られることが分て。(←分つて)
- ・疲れちゃた息子が。(←ちやつた)
- ・ロバは河の中に落としてしゃだ。(←しちやつた)

以上の音環境以外の誤用は以下のようなものである。

- ・長い道を走て、親子はすごく疲れましてので。(←走つて)
- ・頭をひねて、必死に考えました。(←ひねつて)
- ・一番気にいたのはやはり。(←気にいった)
- ・もうひとつ気にいたのは。(←気にいった)

なお、促音の脱落は後続子音が/t/の場合に集中しているが、これも促音の添加の場合同様、動詞のテ形とタ形が多く現われたためである。

3. 長母音

中国語では母音に音韻論的な長短の対立が無いため、中国語母語話者にとって日本語母音の長短の区別はかなり難しいものであるが、作文での誤用に関しては、長母音の添加、脱落ともに少なかった。

1) 長母音の添加

- ① 頻度 4.12% 4個
- ② 語頭 /o/→/o:/ (1個)、/a/→/a:/ (2個)、/u/→/u:/ (1個)
- ③ 語中と語末 なし
- ④ 先行子音 /d/ (1個)、/h/ (1個)、/Φ/ (1個) /p/ (1個)

誤用はすべて語頭で起こっており、語中及び語末で起こったものはなかった。以下が誤用の例である。

- ・はい、どうの柄がお好きになりますか。(←どの)

- ・ハーリーは魔法学校に通い始めた。(←ハリー)
- ・ふーと彼は電車の中の事を思い出して、(←ふと)
- ・パーピーウォーカーと呼ばれる育ての親に預けられる。(←バピーウォーカー)

2) 長母音の脱落

- ① 頻度 6.18% 6個
- ② 語頭 /ɑ:/→/o/ (3個)
- ③ 語中、語末 /ɑ:/→/o/ (5個) /a:/→/a/ (1個)
- ④ 先行子音 /d/ (4個)、/t/ (2個)

長母音の添加の場合と異なり、長母音の脱落の誤用は語頭、語中、語末いづれにもみられた。他の母音と比べて/o/の脱落が多かった。また先行子音はすべて歯茎閉鎖音であり、その中でも有声歯茎閉鎖音/d/が比較的多かった。しかし、上記の特徴が長母音脱落を引き起こす音環境であるかどうか確定するためにはもう少し多くの誤用例を分析する必要がある。

- ・どして乗らないの？ (←どうして)
- ・どして突然に、(←どうして)
- ・どしましょうか？ (←どうしましょうか)
- ・ほんどに不孝なこどもでしたね。(←ほんとうに)
- ・ところが、ストーリーは主役よりいいと思った。(←ストーリー)
- ・傘のポスタです。(←ポスター)

4. 撥音

1) 撥音の添加

- ① 頻度 2.12% 2個
- ② 先行子音 /t/ (1個)
- ③ 先行母音 /a/ (1個)、/o/ (1個)
- ④ 後続子音 /n/ (2個)
- ⑤ 後続母音 /a/ (1個)、/o/ (1個)

撥音の添加については、頻度が少ないため、その傾向と原因を考察するのは難しい。撥音の脱落はなかった。

- ・「あんなに親不孝な子供が世の中にいたんの？ (←いたの)
- ・オーナーさんは、(←オーナー)

5. 音韻の交替

1) 特殊拍の混同

中国語母語話者に限らず、日本語学習者にとって特殊拍(促音、長母音、撥音の総称)は習得困難であるが、ここでは、特殊拍同士で混同が起こっているものを挙げた。

- ① 頻度 5.15% (5個)
- ② 項目 長母音の撥音化(1個)、促音の撥音化(1個)、連母音の撥音化(1個)、撥音の長母音化(1個)、連母音の促音化(1個)、

- ・そばを通りかかったおばんさんに出会いました。(←おばあさん)
- ・ひどい親だね、自分がロバに乗んで、(←乗って)
- ・けん察学校時代の恋人メイと別れ、(←けい察)
- ・宇宙空間の宇宙船とステーションの機能は(に)異常が起こり、(←ステーション)
- ・買主は今回お父さんにすわってみてもらったいと言う。(←もらいたい)

2) 母音の交替

- ① 頻度 9.27% (9個)
- ② 語頭 (0個)
- ③ 語中、語末 /i/→/e/ (1個)、/e/→/i/ (1個)、/e/→/o/ (1個)、/a/→/i/ (1個)、/a/→/e/ (1個)、/o/→/a/ (2個)、/o/→/i/ (2個)

母音の交替については、/u/以外すべての母音に誤用が見られ、その誤用の傾向を見出すことはできなかった。

- ・二人は幼なじめです。(←幼なじみ)
- ・途中ある老人が子供を叱りつきました。(←叱りつけ)
- ・それども、歩くを続けました(歩き続けました)。(←それでも)
- ・人気は衰えることを知りない。(←知らない)
- ・愛想笑いを浮かべながら、(←浮かべ)
- ・傘屋さんは朝読みあわった新聞を私にくれました。(←おわった)
- ・ところが、後ろからあるおじいさんの大きな叱り声が聞こえました。(←ところが)
- ・「どいしようかなあー！」(←どうしようかなあ)

- ・ そいすると、ある老人が子供を叱りつけました。
(←そうすると)

3) 子音の交替

- ① 頻度 1.03% (1個)
- ② 語頭 (0個)
- ③ 語中、語末 /s/→/t/ (1個)

- ・ あの子どもはかわいとうね。 (←かわいそう)

6. その他

- ① 頻度 5.15% (5個)
- ② 項目 促音の位置の誤用 (2個)、
撥音の位置の誤用 (1個)
長母音の位置の誤用 (1個)
清濁の複合的誤用 (1個)

- ・ 気がつかなった。 (←なかった)
- ・ それにしでも誰に助けに来てくれなった。
(←なかった)
- ・ 一番面白いのところはコンナがいつも時計型麻醉銃で
小五郎に眠らせて (←コナン)
- ・ 学校でも、デパートでも、街でもどんな所で必ず殺人
事件に逢う、 (←デパート)
- ・ クジラを守るたげではなく、 (←だけではなく)

おわりに

以上、中国語母語話者の日本語作文にみられる誤用の中で、特に母語音韻干渉によるものと思われる誤用を分析した。その結果、次のことが明らかになった。1つ目は、誤用の大半は清濁に関する誤用(全体の41.23%)と促音に関する誤用(全体の25.7%)であり、この二つの項目をあわせた誤用が占める割合は全体の67%であったことである。したがって、日本語教育では、この

2つの項目に特に力を入れる必要があろう。2つ目は、清音の濁音化において、明らかに母語音韻の干渉が原因とみられる誤用の特徴が見出せた。その他の項目に関しては、ある傾向がみられる項目があったものの、今回、分析した作文データが少なく、十分な数の誤用例が抽出できなかったため、その音環境の特徴が十分に明らかになったとは言いがたい。したがって、今後、引き続き作文データを分析し、誤用の音環境をさらに明らかにすると同時に音声学的な考察を進めていく必要がある。また、日本語レベル毎の誤用の特徴を比較することも今後の課題である。

参考文献

1. 内田照久：外国人日本語学習者における長音・促音の聴覚的認知の特徴. Japanese Journal of Educational Psychology 41: 414-423, 1991
2. 杉藤 美代子：中国語母語話者による日本語の無声子音・有声子音と、有気音・無気音. 日本語の音. 和泉書院, 大阪, pp.264-285, 1996
3. 蔡茂豊：大専用書 口語発音. 大新書局, 台北, 1983
4. 西端千香子：閉鎖持続時間を変数とした日本語促音の知覚の研究—日本語母語話者と中国語母語話者との比較—. 日本語教育 81号: 1993
5. 西端千香子：中国語母語話者にとって聞き取りにくい促音とは. 平成 7年度日本語教育学会秋季大会発表予稿集: 177-183., 1995
6. 皆川泰代：促音の識別におけるアクセント型と子音種の要因 韓国・タイ・中国・英・西語母語話者の場合. 平成 8 年度日本語教育学会 春季大会予稿集, 97-102., 1996
7. 関光準：韓国人学習者の日本語作文に見られる母語音声の干渉, 2000
(<http://www2.kokken.go.jp/~smudr/public/sakubun/docs/mgj.pdf>)